

令和二年度 推薦入学試験問題

国語

◎ 指示があるまで開かないこと

北海道社会事業協会 帯広看護専門学校

問題一

公共的な乗り物にシルバーシートなるものが出現してから、もうずいぶんときがタ^aつが、私は、これが出現したときにかなり違和感を抱いた。おそらく少なからぬ人が疑問を感じたのではないかと思う。当時の投書などをあさってみれば、賛否両論でにぎわっていたはずである。しかし、今では既成^a事実^aに慣れてしまつて、ほとんどだれもこのシステムに異を唱える人はいないようだ。だが、私の違和感は依然としておさまらない^①。

現在は「優先席」と名指しされて、老人だけでなく、障害者^b、ニンプ^b、小さい子ども連れの乗客などの絵記号シートが貼つてあるのを見かける。A、「お年寄り、体のご不自由な方、小さいお子さんをお連れの方には席を譲りましょう」といった放送が繰り返し流れてくることもある。

この場合、問いたいのは、これらの「弱者」をいたわる心情そのものは是非ではない^②。こういう枠組みをわざわざルールのように設定して、あなた方一般乗客は、どんな場合にも絵記号シートに該当する人を優先する心がけを持たなくてはいけないのですよと啓蒙^{けいもう}しているような、押し付けがましい姿勢^{いせい}についてである。

私たちは、ごく普通の人間性を備えていれば、たまたま街や乗り物のなかで困っている人に出会ったときに、思わず援助の手を差し伸べるものだ。

もちろんその意志の発動にはそれぞれに限定条件がある。その種の人がいることに気づいたとき、私たちのなかにはいろいろな心理が働く。たとえば、自分からは距離が遠すぎるから、近くの人がやつてくれない^③だろうかとか、わざわざ人前で「善行」を示すのはスタンドプレイのように見えて気恥ずかしいとか、こっちは今仕事でたくさんだから他人になど構つていられないとか、この人は席を譲るほどいたわられるべき人だろうか、かえつてプライドを傷つけられるのではあるまいか、など。

また、人間性といつてもいろいろである。まわりによく気配りしている人もいれば、自己中心的であまりまわりなことなど考えていない人、親切の押し売りをしたがる人など。

これらは、ときに応じて複合的に作用して、席を譲る、譲らないの選択を条件づける。しかし、赤のBが肩を触れ合う距離で接触しなくてはならない電車のなかのような空間では、こういう限定条件は、それが他に迷惑を及ぼすものでない限り、そのまま認められるべきなのである。「みんな、弱い人には優しい同情心を持つように常に心がけましょう」などという思想は、日常の個々の具体的な場面では、動機の一つとしての意味しか持たず、またそれ以上の強制的な意味を持つべきではない。

よく、「今の若い者は眼の前に年寄りがいるのに、席も譲らない」などと、人心の荒廃ぶりをナゲク^c向きがある。たしかに都会^いでは、個人主義的傾向が進んで、眼の前に何があつてもなるべくかわりたくないという心理が、若者だけでなく、私たち一般に浸透^{ひん}している側面はある。それには、見ず知らずのBに対する警戒心も手伝っているだろう。

しかし、不屈き者はいつの時代にもいる。また一方には、「茶髪、ピアスのおにいちゃんが、とても優しく親切にしてくれた。今の若者、捨てたもんじゃな^い」といった経験談のたぐいもたくさんある。そういうわけで私自身は、明確な「人心の荒廃」の兆候^{ちせう}などあまり信じないのである。逆にかつての時代が、そんなに良識あふれた時代だったとも思えないからだ。

人間のこういう部分というのは、あまり変わらないと思う。優しい人、冷たい人、積極的な人、消極的な人、いろいろいるが、眼の前の事態がシンコク^dであれば、それに応じて援助の行動はそれなりにあらわれるものだ。重大な交通事故が起きたときや阪神・淡路大震災のときの人々の対応などを見ると、そのことがよくわかる。

シルバーシート、優先席のようなことさらな区画づけは、かえつて、自然な接触による自然な同情心の発露を抑制する効果を生む可能性の方が高い。人々は、そういう区画づけの前に立たされると、概して「そこに座りたいと

いう意に反して、仕方なく規則に従う」という心理的な反応しか示さない。

他の席がふさがっていて、立っている人がけっこういるのに、優先席だけは空いているというコウケイにしばしば接することがある。これは、優先席に座ることで、その該当者が乗り込んだときに規則に従って立ち退かなくてはならない心理的な負担感を、あらかじめ避けようとするのである。多くの人が、そこに空席などはないものと見なすのだ。そのことによって、かえって人は、「弱者」⁽⁴⁾との個別の接触を避けることになり、そういう問題を自分で考えたり自らの意志で行動したりするきっかけを失うことになる。

私自身は、「優先席」だろうとそうでなかるうと、席が空いていればかまわずに座ることにしている。「優先席」に座っていて、該当者が来たら、よほどのことがない限り譲るだろう。その心づもりは、普通の席に座っている場合も基本的には同じである。ただしこれは正直なところ、すでにそういう区別がなされているという事態に対するかなり意識的な対応であって、「優先席」に座っている場合に、その「規則」的なものから拘束^オされている窮屈な感覚をまったく抱かないと言ったら嘘になる。

C 「優先席」の存在そのものが、自然な同情や親切心の発露を封じ込め、かわりに、気後れやこわばりの意識を誘発しているのだ。この種のものはない方がいいのである。あるいは、あってもなくても同じであって、そういう配慮のためにお金や神経を費やすのは無駄なことである。

(小浜逸郎「弱者」とはだれか)

訊問一 傍線アからオの漢字を平仮名(ひらがな)に書き換えなさい。

訊問二 傍線aからeの片仮名(カタカナ)を漢字に書き換えなさい。

訊問三 A、C にはどんな接続詞(つなぎことば)が入るか。次の中から最も適当と思われる語を選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア つまり イ また ウ したがって エ だが

訊問四 傍線①～④の「ない」の中で、品詞の異なるものをも一つ選び、番号で答えなさい。

訊問五 B に共通して入る最も適当な二字の熟語を、本文中から書き抜きなさい。

訊問六 傍線(1)「押し付けがましい姿勢」とあるが、この表現には筆者のどのような気持ちが込められているか。次の中から最も適当と思われるものを選び、記号で答えなさい。

ア 周囲の人に迷惑を及ぼすものでない限り個人の思想は認められるべきなのに、認めようとしないう体に反抗する気持ち。

イ ごく普通の人であれば当然「弱者」をいたわる心情が働くものなのに、わざわざそのように指示することを批判する気持ち。

ウ 人前で「善行」を示すにはさまざまな心理が働くにもかかわらず、優しい同情心とひとまとめにされることを憤る気持ち。

エ 困っている人に援助の手を差し伸べるのは無意識の働きであり、いつ働くのかわからないと困惑する気持ち。

訊問七 傍線(2)「自然な接触による自然な同情心の発露を抑制する」とはどういうことか。具体的に述べている箇所を、本文中から三十字以内で書き抜きなさい。

訊問八 傍線(3)「規則に従って立ち退かなくてはならない心理的な負担感」を具体的に表す最も適当な語句を、本文中から十一文字で書き抜きなさい。

設問九 傍線(4)「『弱者』との個別の接触」とはどういうことか。それを具体的に表す最も適当な二字の熟語を、

本文中から書き抜きなさい。

設問十 本文の主旨として最も適当だと思われるものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 現代は人心が荒廃したと考える人も多いが、人間性は今も昔もあまり変わらない。

イ 現代人は個人主義的傾向が進んでいるため、強制されることに対して心理的負担を感じやすい。

ウ 「弱者」をいたわる気持ちは誰にでもあるが、行動に移せるかどうかは人それぞれである。

エ 「弱者」に手を差し伸べる行動は自然にあらわれるものであり、それを強要するような思想は逆効果である。

問題二

気象学の領域においては、早くから世界中の科学者が協力して研究を進めてきました。戦後間もない1947年には、アメリカのワシントンでカイサイ^aされた国際気象台長会議において、世界気象機関条約が採択されました。同条約が1950年に発効して設立された世界気象機関 (World Meteorological Organization : WMO) は、^b 国連の専門機関です。ここでは世界各国の気象機関や研究者が協力して、世界の気象業務に必要なキカク^b・調整活動を行っています。

そもそも大気や海洋の現象は、一国内だけで完結するものではありません。大陸の東、海洋の西にある日本の気候は、ユーラシア大陸や太平洋などからの影響を直接的・間接的に受けています。正確な週間天気予報や季節予報のためには、日本周辺のみならず、はるか遠方の気象・海洋観測データを知ることが必要不可欠^aです。逆に、日本の周辺の気象・海洋観測データは、アメリカなど遠隔地での気象予報に不可欠^aなのです。これは、★テレコネクション¹の概念からも納得できることだろうと思います。

こうして、気候学・気象学・海洋学の分野では、観測データは世界中で共有することが当たり前となったのです。気象学の領域では、ビッグデータが注目されるはるか以前から大量のデータを扱ってきました。これと同様に、グローバル化が声高に叫ばれるずっと前から、² 気候学(気象学・海洋学・雪氷学を含む)ではグローバルが当たり前となったのです。すなわち、データをグローバルに共有しながら、各国の研究者たちがしばしば互いに協力し合い、ときにはキノイ^c合い、日々の研究に情熱を傾けるのが気候学の世界です。

その象徴が、各国の気象局のもつ数値天気予報モデルや、各研究機関のもつIPCC評価報告書に用いられた数値気候モデルと云ってよいでしょう。これらの数値気候モデルには、世界の最新の研究をハンエイ^dさせ、必要に応じて他国の関係者と情報交換しながら、たゆまぬ改善が図¹られています。また、研究の基盤となる観測データは、できるだけ世界中で共有しながら、それを研究者がそれぞれオリジナリティある視点から膨大なデータの解析^ウに取り組み、情報交換しながらお互いに A 磋琢 B し合う――。これが気候学者の基本的なスタンスです。

C、世界で共有されるのは観測データだけではなく、数値天気予報の初期値に用いられるデータもありま^ス。近年は、アンサンブル数値天気予報のデータやIPCC評価報告書に用いられた多数の数値気候モデルによる気候再現実験や将来予測実験のデータも、世界的に共有されるようになっていきます。ちなみに、これらは想像を絶するほど膨大な量のビッグデータで、衛星観測データもまたしかりです。

気候学に関わる者にとって研究の究極の目的は、気候システムの成り立ちやその内部に生起する多様な現象、それらが互いに複雑³に及ぼし合う影響(相互作用)の実態をハ^eアクし、そのメカニズムや予測可能性に関する理解を深めることです。D、それらの理解と知見に基づき、地球気候のこれまでの変遷^エと変動を理解しつつ、⁴ 全球的・地域的に将来の変化を予測し、その不確実性を評価することです。

このとき、単に将来予測を示すのではなく、その科学的解釈も添^オえることが大切です。その際、テレコネクションや異常気象に関する理解は不可欠となるでしょう。

こうした気候学の成果は、われわれが地球と人類の未来を考えるうえで基礎となる重要な知見を提供します。政策的な判断にも活かされ、地球の将来をも左右しうる知見と言えるでしょう。

(中村尚『日本の四季』がなくなる日』 一部改変)

(註)★テレコネクション ある地域で起こった異常気象が、遠く離れた地域の異常気象と連動すること、遠隔影響。

設問一 傍線アからオの漢字を平仮名(ひらがな)に書き換えなさい。

設問二 傍線aからeの片仮名(カタカナ)を漢字に書き換えなさい。

設問三 傍線(1)「納得できる」を意味する慣用句はどれか。次の中から最も適切と思われるものを選び、記号で答えなさい。

ア 馬脚をあらわす イ 腰を据える ウ 腑ふに落ちる エ 水を向ける

設問四

A

、

B

にそれぞれ漢字一字を補い、適切な四字熟語を完成させなさい。

設問五

C

、

D

にはどんな接続詞(つなぎことば)が入るか。次の中から最も適切と思われるものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア なお イ でも ウ あるいは エ そして

設問六

傍線(2)「気候学……ではグローバルが当たり前となっていた」のはなぜか。その理由を、本文中の語句を用いて三十字以内で説明しなさい。

設問七

傍線(3)「複雑」と反対の意味を表す二字熟語(対義語)を書きなさい。

設問八

傍線(4)「全球的・地域的に将来の変化を予測し、その不確実性を評価すること」は、何のために必要なのか。本文中の語句を用いて二十字以内で述べなさい。